

論文審査の結果の要旨

佐野真由子

本論文『幕末外交儀礼の研究－欧米諸国外交官による登城・将軍拝謁式を中心に』は、幕末の日本が西洋に開国した際に設定した外交儀礼を正面から取上げた、初めての実証的研究である。

従来、幕末日本の外交史は、西洋諸国との間に生じた様々の外交案件に則し、彼我の政治交渉とその結果、および日本の外交政策の変化を中心に、研究が積重ねられてきた。しかしながら、この過程は同時に、日本を含む東アジアの国際関係を律してきた伝統的な外交の文法が西洋との緊密な国際関係の発生によって大きく変化するものでもあった。それは外交儀礼に瞭然と現れた。外交を取結ぶ基盤となり、同時に国家間の地位関係を可視化する外交儀礼は、それ自体が外交争点となりうる問題であった。日本の場合、隣国の清朝ほど深刻な問題とはならなかったが、日本人在来の秩序観を揺さぶるものであったことに変わりはない。

しかしながら、19 世紀日本における外交儀礼の変化は、重要な研究課題でありながら、生田美智子の対露関係に関わる業績を顕著な例外として、今まで研究されてこなかった。本論文は西洋使節による徳川将軍への拝謁という外交儀礼の核心部分を取上げ、前後 17 回に上るそれを一次史料により網羅的に検討することによって、研究史上初めて幕末日本におけるその変化を具体的に把握できるようにしたものである。その全体は、序章と終章のほか、6 章からなっている。以下、章ごとにその内容を紹介する。

序章では、研究の意義とカバーする時期・研究方法・史料、および先行研究との関係を略述する。第 1 章は、幕末における西洋との接触以前に徳川将軍が江戸城内で執り行ってきた儀礼を、先行研究に依拠しつつ簡潔にまとめる。年始や月次御礼を初めとする年中行事や臨時の儀式、および将軍宣下などの大札は、それぞれに用いる部屋や装束等が異なり、それが儀礼の軽重や参列者の地位を示すゆえに、幕末に来訪した西洋外交官の待遇を理解する重要な手がかりとなる。ここでは、幕末の儀礼設定に当って参照された朝鮮通信使の将軍拝謁儀礼をとくに詳述し、さらにこれを提唱した幕臣筒井政憲の興味深い閱歴を紹介している。

他方、幕末の外交儀礼は、同時代西洋で形成されつつあったプロトコルにかなうようにも設計された。そのため、第2章では、西洋での外交儀礼形成の由来と意味、のちにアーネスト・サトウによってまとめられたその概要、およびその非西洋世界への適用原則が紹介され、それが現地の事情にかなり適応的であったことが指摘される。

以上の準備を経て、第3章は、西洋人による最初の将軍拝謁、幕末以降の外交儀礼の基本を形作った1857年における米国使節タウンゼント・ハリスの江戸参府と将軍拝謁について詳述する。幕府は当初、ハリスの信任状奉呈の要求に対し消極的であったが、結局はこれを受入れた。この経緯については一次史料により通説が訂正され、筒井政憲の意見に基づいて「朝鮮信使之振合」が一つのキーワードとなったことが指摘される。その後、ハリスの出府と将軍拝謁および饗宴について、段階を追って丁寧な説明が展開されるが、米使迎接の姿は、大まかには朝鮮通信使より一格下、琉球慶賀使よりは一格上と見なすことができるものであった。とはいえ、儀式内の個々の要素は、ハリスと交渉しつつ、殿中の諸先例を適宜参照しつつ定められ、決して国家単位のパッケージとして設けられたわけではなかった。その結果、ハリスの側はこの儀礼を西洋の作法によって行われたと見なしたという。

第4章と第5章は、その後の西洋外交官との迎接儀礼の展開を追っている。その際には、ハリスの迎接が西洋初の儀礼として盛典だったのに対し、日常化が図られて装束などがより簡素になった。しかし、ハリスが公使昇格のため改めて拝謁したとき、この降格に気づいて抗議すると、やや厚遇に戻して武家の官服たる直垂を用いることとし、以後、この様式が英公使・次代米公使・仏公使などに適用された。

これらの迎接が行われた1862年以降、尊攘運動の激化に伴って外交使節の迎接は5年間の中断を見た。復活したのは、条約が勅許され、さらに徳川慶喜が将軍職についたのちの1867年で、第6章がこれを詳述する。この儀礼は英蘭仏米の各公使を対象として大阪城で執行されたが、迎接儀礼は大幅に改訂され、日本側の装束を除いては西洋と変わらないものとなった。最初、以前の定型に饗宴を付加する程度の計画であったが、仏公使ロッシュやイギリス公使館員ミットフォードの進言を得て、儀式を内拝謁・饗宴と本拝謁との2回に分け、饗宴では西洋料理が供されて将軍自らがもてなし、祝杯を交す一方、本拝謁では従来将軍と一室を隔てていた公使たちの立ち位置を随意の場所とし、信任状も直接手交することとなったのである。この様式は、幕府の瓦解後、明治天皇が行った公使引見の際にも基本的には踏襲されることとなった。

以上の検討を経て、著者は終章で、幕末の日本が比較的円滑に西洋側も納得できる将軍拝謁儀礼を設定し、「類い希な文化融合を実現し」、かつ「対等外交」の確保に成功したと述べる。その決め手となったのは、幕府が朝鮮通信使を初めとする国際関係業務の経験を持ち、それをうまく援用したことであった。著者はここに、とかく伝統と西洋文明との断絶を見がちな幕末について「近世」と「近代」との連続面があったことを明らかにする。同時に、幕府の外交儀礼設定が「理念」本位でなく、時々々の必要に応じた実践本位のものであったことがこれを可能としたと述べ、さらに西洋側にも「現地のマナー」を尊重する態度があった事実も指摘する。末尾では、今後の研究課題として、日本からの遣外使節が海外で学んだこと、および中国を初めとする近隣との比較の必要を挙げて締めくくっている。

以上が、本学位請求論文の要旨である。

本論文は、幕末日本の外交儀礼という重要なテーマについて、研究史上の大きな空白を埋めることに成功している。しかしながら、若干の問題も無いわけではない。その一つは、外交官たちの実践を一次史料によって丁寧に追う余り、外交儀礼それ自体が持っていた構造を軽視した点である。江戸殿中における西洋使節の待遇は、その立ち位置が大広間下段であったように、幕府が対等交際と目していた朝鮮通信使の大広間中段より低く、まして将軍宣下で上段に上る勅使よりははるかに低かった。慶喜以前にあって西洋諸国は朝鮮より下に位置づけられていたのは明白である。他方、同時代の清朝では国際関係の核が朝貢にあったため、幕末日本ほどの儀礼を設定するに当たっても困難を極め、長い外交紛争が生じた。この点に留意して比較するならば、日本での儀礼整備や執行がなぜ円滑に進んだのか、いま一步踏込んだ説明が可能となったことだろう。

しかしながら、本論文の幕末日本史研究および近代世界における外交儀礼研究一般への貢献は疑いもない。幕末日本に関して一次史料を網羅的かつ明晰に分析したこの論文は今後における研究展開の出発点となるはずであり、その開拓性、画期性および実証性は上記のような弱点を大幅に上回っている。したがって、本審査委員会は、本学位請求論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと判定する。